



わた一貫目と

鐵一貫目

波多野完治

「わた一貫目と、鉄一貫目とでは、どつちが重い？」
こうきかれて、

「同じさ」

と答えられる子どもは、幼児としてもかなりおませな、
利口な子どもということなっている。

だが、実際に、わた一貫目と、鉄一貫目とをもつたと
したら、どうだろうか。

わたの方がはるかに軽くおもわれるのである。

わたくしが前にしらべたところでは、鉄三百目に対し
てわた八百目位までは、鉄の方が重く感ぜられる。

こういう現象を「形と重さの錯覚」というのだが、問
題は一体こういう現象が生れたときのものか、又は生
れてからしばらく時がたつてからでてくるものか、とい

うことである。

もう一つ。

五十米先に人間が立っている。もう一人、百米さきに
人間が立っている。

目の中——つまり網膜にうつる人の形は、百米さきの
人間が半分になつてゐる筈である。これはシャシンをや
つた人ならすぐにわかる。

ところが、我々にはそうはみえない。五十米さきの人
間も百米さきの人間も大体同じにみえる。同じように、
五尺の身長をもつた、普通の人にも見える。

五十米の方が普通にみえ、百米の方がコビトにみえた
ら大変だ。

、こういうのを「大さの恒常性」という。

ところで、ここで問題なのは、こういう現象が一体い
くつ位のころから出てくるものか、ということである。

今までよくいわれていたところでは、人間の感覚は、
生後一ケ年もすれば、大体大人の九割位までの能力にい
くので、それからさきは「感覚」に関する限り、あまり
のびていかないということであつた。

音などは生れて二週間もすると、きこえるようになり、
生後一ケ年位で、大人のききうる音の九割位までいく。

「視力」の方もその通りで、四ヶ月位から大人と同じよ
うに物をみることが出来るとされていた。

もしそうだとすれば、大さの恒常性などは「乳児」のときにできるようになつてしまふわけであり、「幼児」の時代としては別に面白いことはなくなる。

だが、形と重の錯覚などでは、ごく小さい幼児は、こういう錯覚をもつていないらしいことが推定されていて、それは、子どもの「判断」の力の未発達にもとずくとされていた。つまり子供は感覚としては形も重さも大人とおなじように受けとるのだが、二つのものをくらべる、というような比較、判断の力がないために、結果が不正確になり、でたらめになるというのであつた。

ところが、この十年間ほど、ピアジェ（スイスの心理学者で、主として幼児心理の研究家）がしらべたところによると、大さの恒常性も、形と重さの錯覚も、七八才ごろまでは成立してきていないのである。

大さの恒常性は小さいうちはない。でも子供には遠くの「人」は「小さく」見えるらしいのである。ごく小さい子供は、だから同じ人間が大きくなつたり小さくなつたりして世界にすんでいるのであるらしい。

形と重さの錯覚の方は、人間の気持のもち方で大変な相違がある。本心に「重さ」をたしかめようという気持ではかると、わた一貫目と鉄一貫目とで、かなり似たところまでいく。しかし、自然な態度で比較すると、前記のように、わたの方が、かるくおもえる。

子供はこういう錯覚が成立していない、だから、わた一貫目も、鉄一貫目も同じ位に受けとる可能性が多い。つまり大人よりも「正確に」物をはかるのである。

このような錯覚が出てくるのはいつごろか。四五才から七八才の間である。即ち幼児の時期である。

なぜでてくるのか。

これはむずかしい。しかし、とも角今まで「知覚」とよばれていたものが、実際は「神経」と物との関係だけでなく、人間の「物」に対する観念によつて左右されていることが大きく、そのためにこのような錯覚が却つて大人につよいという現象があるようである。

子供には「人間の大きさ」について、固定した観念はない。これは「物」——即ち目をつぶつてもきえてしまわず、我々の外に我々が死のうと生きようと存在しているものの観念が不十分であることの一つの特殊の場合なのであつて、これは幼児の時期に除々にできていくものらしい。

幼児心理学も、こうして急にいそがしくなつてきた。いや、心理学として急がしいというより、哲学として、認識論として、あるいは又、「唯物論と観念論」の問題として、いそがしくなつてきたのである。